

笛吹市探訪

笛吹市の史跡⑧

甲斐国分尼寺跡

甲斐国分尼寺跡

今回の笛吹市探訪では、一宮町にある甲斐国分尼寺跡(かいこくぶんにしじょう)について紹介します。

甲斐国分尼寺跡は、国分寺とともに天平13年(西暦741年)に聖武(しようむ)天皇の詔(みことり)によって建てられました。

国分尼寺は女性のためのお寺で、聖武天皇の(后)きさきであった光明皇后(こうみょうこうこう)の希望で

建てられたと言われています。

光明皇后は、大宝元年(701年)に藤原不比等(ふじわらのふひと)の3番目の娘として産まれました。その後、同い年の聖武天皇がまだ皇太子だった時代に結婚し、即位した後皇后になりました。

皇后は深く仏教を信仰しており、東大寺の大仏や国分寺・国分尼寺の建設は、皇后が天皇にすすめたもので

あると伝わっています。

また、貧しい人に施しを行うための施設「悲田院(ひでんいん)」や医療施設である「施薬院(せやくいん)」を設置するなど、光明皇后は今で言う社会福祉事業も行いました。

奈良にある法華寺は、皇后の父親である藤原不比等の屋敷を寺としたもので、全国の国分尼寺の中心とされました。今も残る本尊の十一面観音菩薩像は、皇后の姿を写したものだといわれています。

甲斐国分尼寺跡は、国分寺跡の北側約500メートルの位置に建てられました。180メートル四方の中に南門・

中門・回廊・金堂・

講堂などがあつたと推定されています。国分寺と違い、塔は建てられませんでした。

中心部には、当

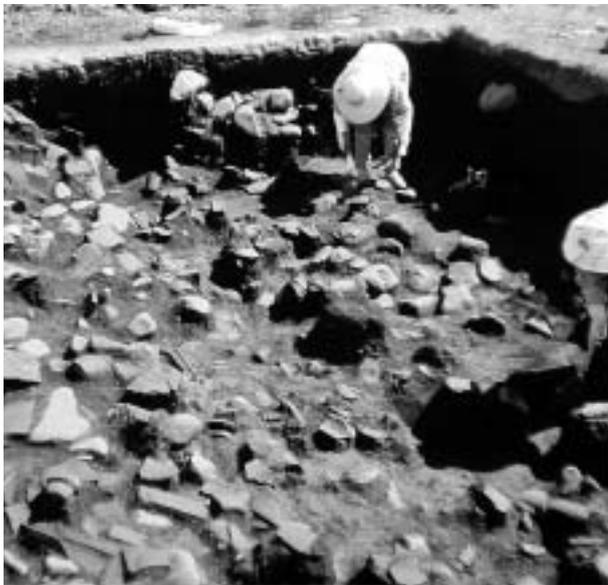
時の建物の柱を支えていた礎石(そせき)が残されています。この場所は周辺の畑より一段高くなっていますが、寺院の中でも特に重要な建物は、基壇(きだん)



上空から見た講堂跡(手前)・金堂跡(奥)



甲斐国分尼寺 金堂跡



発掘調査

という土を盛り上げた壇の上に建てられていました。この場所には2つの建物が建てられていて、南側が仏像をまつた金堂跡、北側は尼僧が修行を行った講堂跡だと考えられています。

寺跡の北側では多数の竪穴(たてあな)住居跡群が見つかり、「法寺」「花寺」などの文字が書かれた土器が出土しました。これらは国分尼寺の正式名称である「法華滅罪之寺」ほつめつざいのてら」を省略したものです。こうした竪穴住居跡には寺院の建設のために働きに来た人たちが住んでいたものと考えられています。